外邦太平記

一

一四三五

月白堂六
全五

西荘文庫

へ 13
3493
1

門 へ 13 3493 1

大學 28.9.11 藏書

外邦太平記序

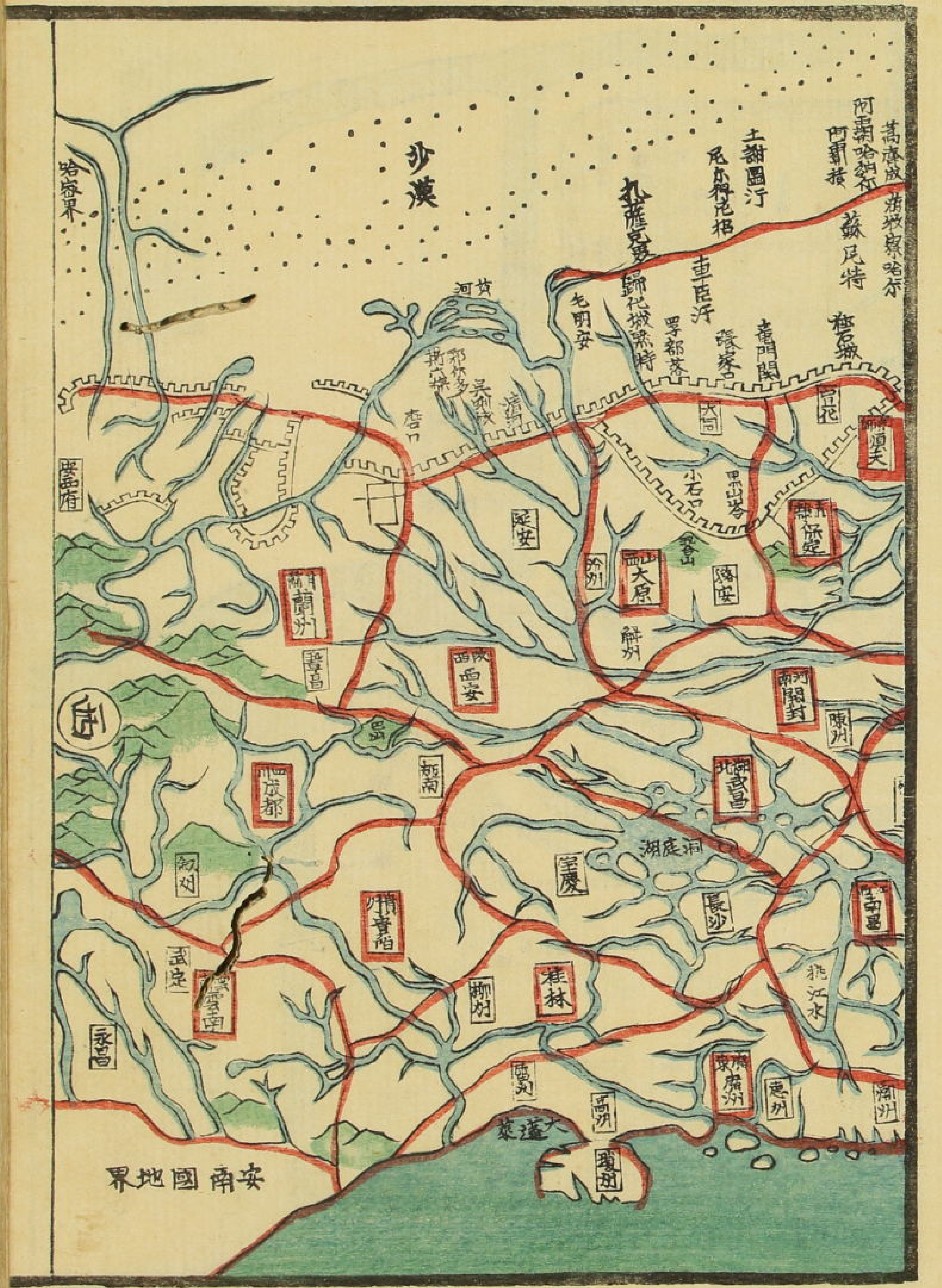
上令下奉乃治國之法也雜物通情乃爲政之要也苟不有寛仁大度英明獸斷必君而由斯道安能定禍亂開大業哉清氏之王

天下之道莫不復由斯道而
及其累世失斯道者亦不
爲不多矣於茲僕其記叓
顚末雖稍與正史不同癸
至若伏節赴難之臣繼志
述叓之子則足以觀廟堂

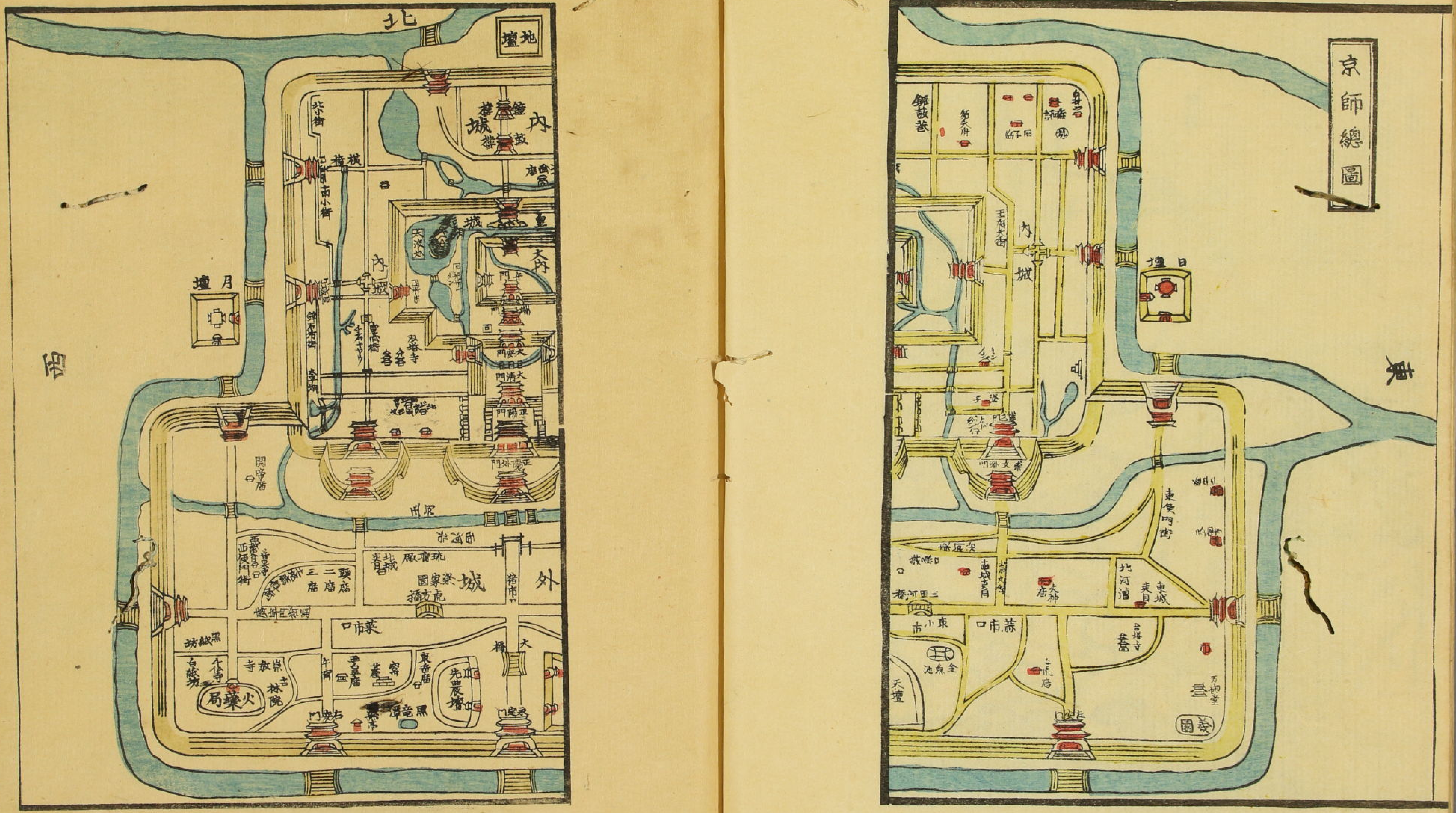
之忠信奇謀之働其示勸
懲於兒女輩世教之一助
成玩讀不罷亦皆幸也言

甲寅立秋

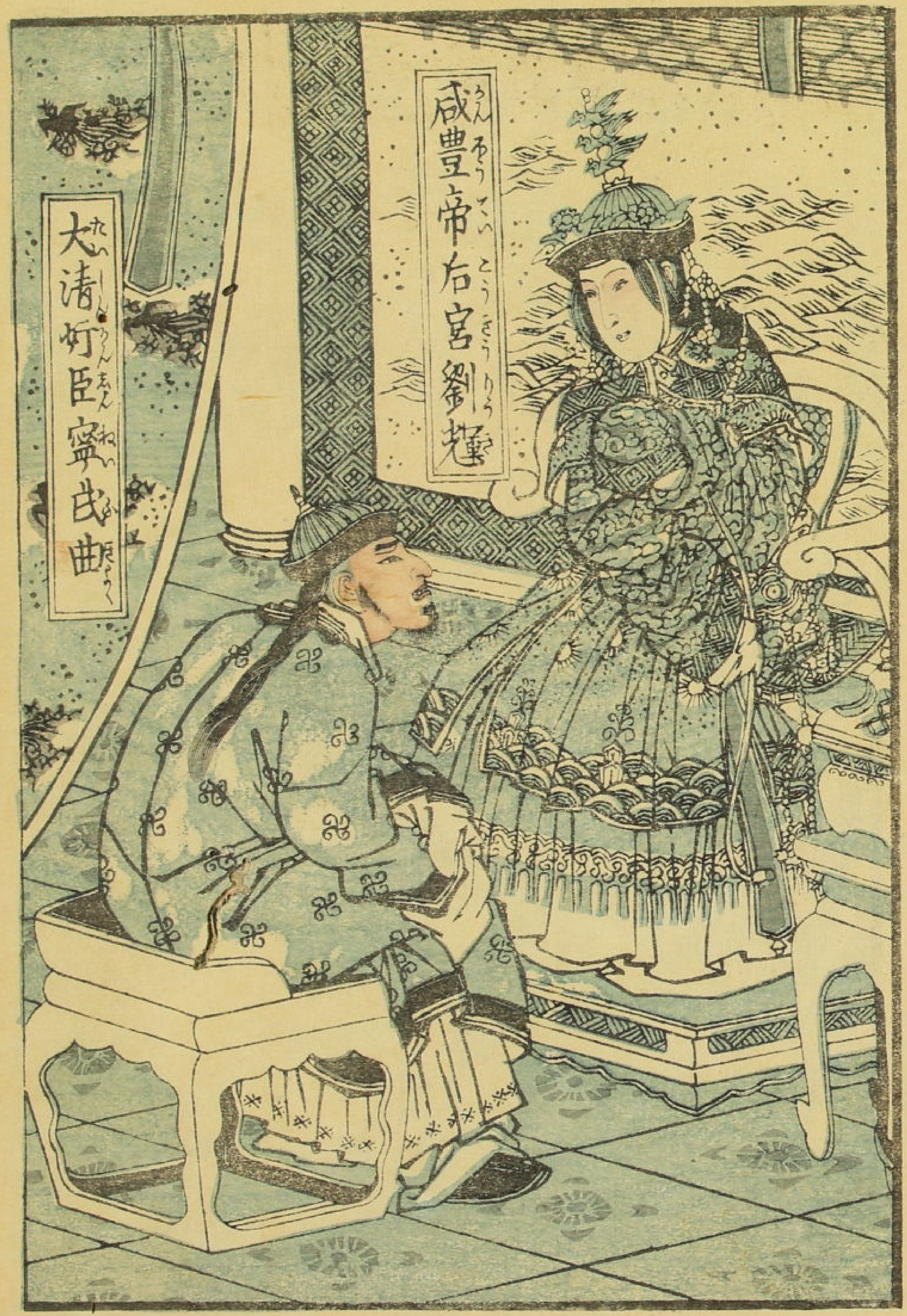
磐上軒主人述


沙漠
西安
太原
成都
洞庭湖
長沙
桂林
柳州
安南國地界

唐土皇輿之全圖
北
東
渤海
朝鮮國
大海洋
臺灣

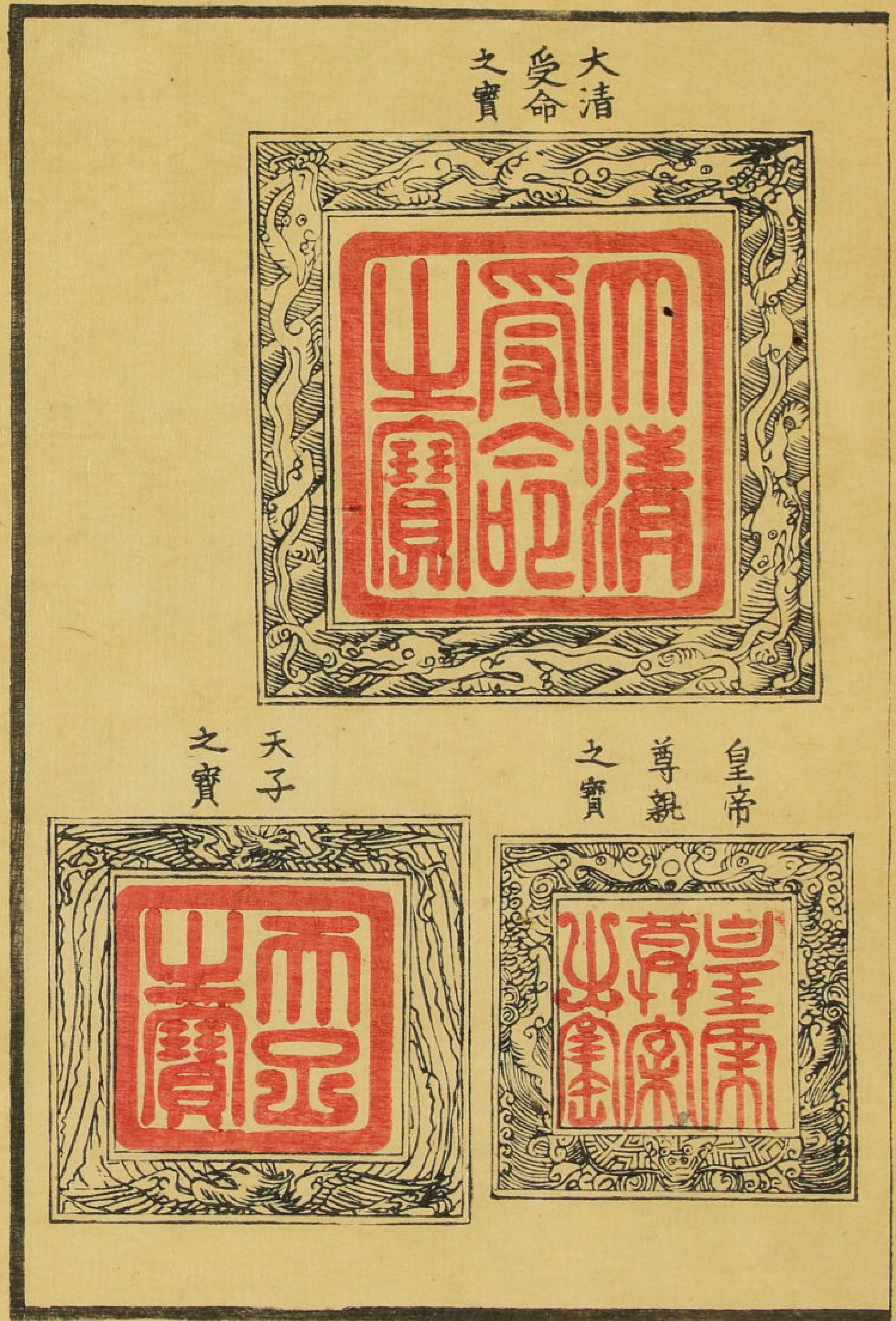

京師總圖
北
西
東
地壇
月壇
日壇
內城
外城
火藥局
先農壇
天壇

大清元師呉陣友


咸豊帝右宮劉氏
大清奸臣寧氏曲

明末ノ勇臣函光

韃靼ノ勇将丁金虎



外邦太平記惣録

巻之壱
一 北京城中軍議評論之事
一 同諸将群集之図
一 石頭城官軍進発之事
一 仝大合戦乱入之図
巻之弐
一 李白玉妖術を以て敵陣を悩ます事
一 李白玉敵の武具を盗去図

一 洪武鈍謀て友軍れ破る事
一 孔平凛寧武曲と相論せし事
一 洪武鈍斗略あり物狸金討死之図

巻之三

一 孔平凛呉陣友の才智を知る事
一 孔平凛酒樽一気呑を呉陣友と知る図
一 孔平凛高馬鈍の才能を得る事
一 高馬鈍錢別而気風を紅後を知る図
一 高馬鈍ちうびる張を以て放火え焼る事

巻之四

一 南京天徳王光列城を攻る事
一 同 光抑誅せ然る此事
一 韓永対死光列旅情之変
一 張道弘玉虎躍韓永を討留る事
一 張旭寧武曲を哀推く事

巻之五

一 后宮小對して武曲讒し奏之事

一 咸豊帝内儀を用ひざるの図

一 官軍退散先帥陳落城さする

一 呉陳友謀て柳天冠を囲む事

一 呉陳友奇計柳天冠驚く此景

一 洪武就而柳天冠小京の大軍敗を修る景

惣目録大尾

外邦太平記巻之二

北京城中寄策論之事

夫為人哉立所旋切者。不許一朝一夕之為。不積累月暦年甚不能切焉。凡天地旧時之運行無一息之間断ありがたき古往今来非止なりして然るに是以て君子法を象むべきなり明末流性は朱名は華字は元嘩民は不人となりしが生性寛仁にして才さ大度の器量ありける時なるかな清の制度不徴ゆして民志をうかがひみを懐くものすくなからずよつて元嘩と李白玉等謀略を定め明朝恢復の旗旌

飄へし廣東福建浙江をおしとおり江西鄱陽湖の戦ひ
に鄧元宗ならびに諸将ちからを合せ應天府に在城をせめけるに
その勢ひはちくのごとくなるゆへ城将もひとしくおそれしりぞきしを
もつて此をそうにおよびて明将等石頭の所き城へ引て寨
威をふるふ故に後来ならびに其の勢でぞく難しく候ふも
蟻の集るがごとし故にまた其勢三十余万と称へたりける時清
の咸豊三年五月元嶂を進発て即位させて天
徳帝と崇め称しまつり則ち年号をつけたち
天徳元年とす後来の人しをみん復明の功あるへくさせ
密にきざむふなんど清国上載せしむるものら仁せんを施

しかるに是等の親族より北京へ注進するもの多く
其の者を引ぐごとし江南の地遠なるしき注進のうつゞ
ぎし者かならず北京城中に入れ帝の年若ましまし清に
上近臣の寧武曲と云ふ佞臣をもつて媚び諂られ剣く
廣西五路の隠劉縣を占後宮にさしよらぞ帝兆
敵窓ふうなひ暫も寧武曲ますく後宮より
射て内謁するゆへ寡がいふ事もちゆられざるなりし
よりて寧武曲が威勢ひ日々に盛んなりそ是にいふごとく
より佞人権をとつて国を誤まり乱しむらず
秦の趙高唐の禄山等に劣らずして佞人なり後世

終にはじきとして膽くる程まで孔有徳は忠烈
無類の者なれバ是等の臣揚をみる事に忍びずか
らざる朝廷の不政を正し君を揚げ侫を退ぞけんと
志す孫可望をもつて執政爲りにかゝさまとも此頃永暦帝
には寧武曲ガ言路に傳よれされ兵燹の下所地を
らそまされ民の歎息を起し あさぼろしくては天下の大半
あり候めぞんで あつくしてと早速朝へ出て後堂つゝまり
謝をまたは帝にいふて孔平淳が寄く奉るまで
なにとぞ孔平淳のいとく明末の織兵広西広東より
蜂起して都陽縣をおさめ南京兵部を定めひ逆へ威

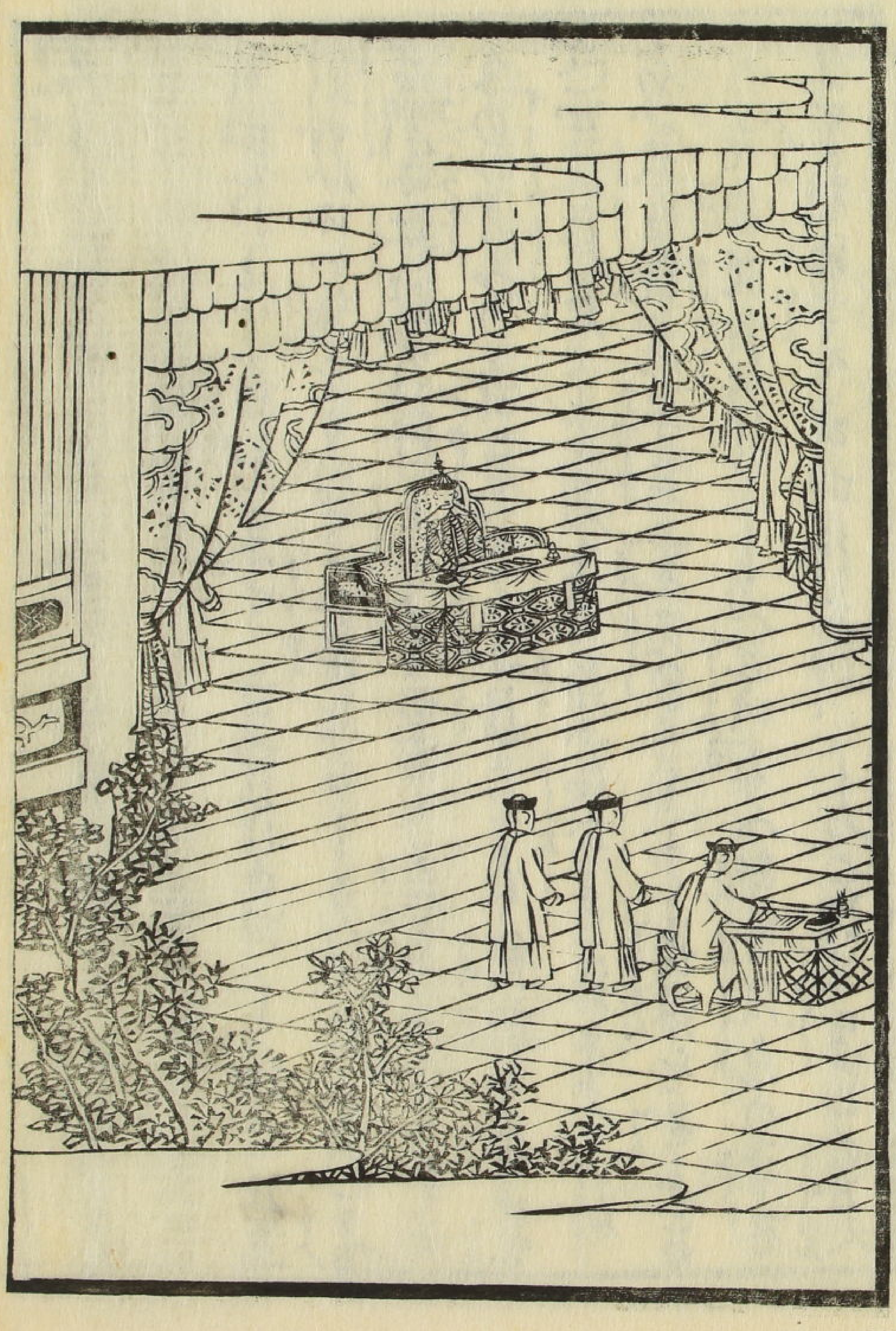
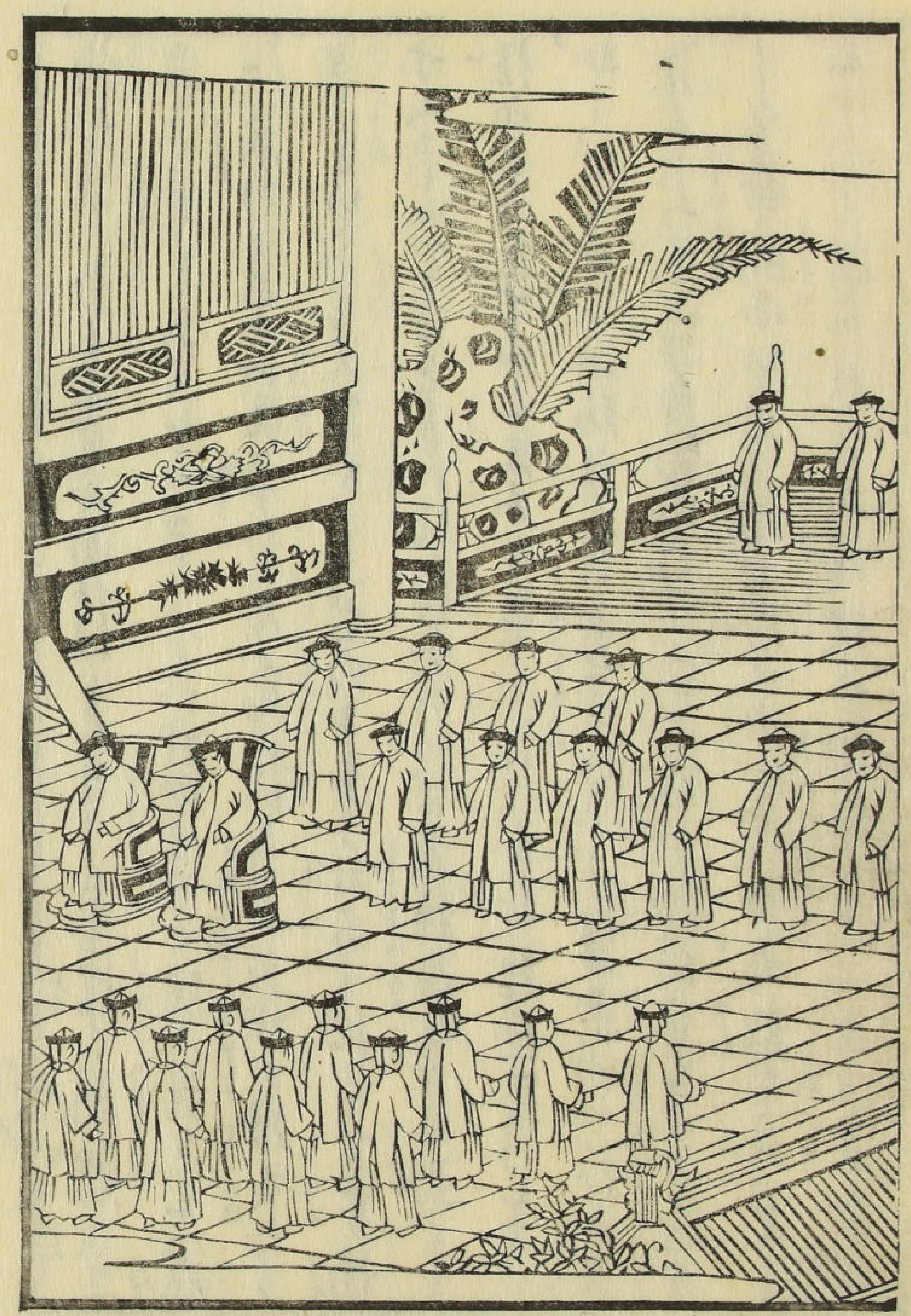
を震ふつて捨居く時は太平ゆゑおよぶならん帝觚愈をめぐ
らされ討手を指向平均して其の乱を安んじなく帝ど
殿下く曰く是れ懼が不徳なり明日殿に参ひて軍第を傳せん
孔平淳進んでいはく何光添ぐるなれん迄たまへ村雲去
是を露落不叢薬なさらんとすれ共秋風是を破る帝不聖
徳明智にましませとも秋風村雲のさゝへに帝曰く
従が身に秋風村雲とは何なるものぞ孔平淳が曰く
若し一天萬乗の玉體にして侫辨淫酒を用ひ自ら是れ秋
風也雲となり不路の一言天下に亂れ天下萬民の
歎き末代までの瑕瑾なり臣が諫言は九牛が一毛第

なるハ寛裕にてなし、故に帝の曰く、汝ドが諫言ハさることなれ
ども、天子の身の上にあり。孫子が賊兵ハ猛勇のよし、昨
日殿中に於て平均の緑略を述よ。殊に平康(?)御衛し
て退くに黒田(?)の附朝廷に参り、我に帝乾清宮
に御ありしぞ。文武の百官を列ね、左右に侍する
時に殿外官なりしに躬ら申く、平定ハ列を設て奏
聞せよとなんぞ、叢(?)拝して退去せよと言ひけるときに
私(?)に長沙(?)百官に進ミて、急ぎ奏しけるハ、今賊軍広西
より攻撃して州々を押とあり。江南(?)の
城にいつて猛威…して(?)…

をひほしいまゝに賊威を震ひ、進て大軍を催して京を侵さん
とするよし聞へあり。善哉、是をなしのがれんぞ、弥く賊せるを
養つて大敵となるべし。伏して望むらくは、帝明らかに是を察
し給へ。帝、厳然として、則ち勅旨あるハ、親に申通り、此大敵
なきを誰が能く向つて平均せよやと、勅使下り、爰に寧武曲
進ミ出て奏して曰く、臣、彼の賊ハいふとも勇なりといへ
ども、いまだ大軍を発せざるに依て、吾一人の申す士を
薦めて賊を討しむべし。帝、ますます勅令有て宣ひけるハ、汝
眼力をもつて人を見る。文武両全の良将あらんを
見するにその名を顕して兵を起さし給へよ。寧武曲奏して

同く此ときに山西平陽府に統制竹人精が玄孫竹粮全といへる
ものなりき元来文武不当の男なりき手下に大き精兵あまた猛
衆にくれ日比なる指揮使の職を授けらひて石頭城をせめさせとま
りし軍に平均せしめて叛賊を安んずべし帝叡感有
てありひに悦びやがて勅書をもれて竹粮全に仰せしめまふ
此日粮全謹んで平陽府に立て武乃を舞じ居なるところに
朝廷より勅書到来すと聞しるしを竹粮全急ぎ城外
に出て勅書を迎へ奉り直ちに拝読し即日用意を整への
て天使と共に京へ上る其日にしくびしして北
京へ上る元来竹粮全よりは大軍を同じく智恵の人

物あらず然るに寧武曲と云ひしより深く韜略を学び
通じ常に武芸をたのみしに武曲幼きしも衆が心を感
じ然れもあらば兄弟と名ふに此度石頭城の賊を征
討として大軍をもつて攻る事日あらずして平均
すべし然るところ竹粮全が切積みなる者へ本く
任ふとりたてんと思ふものから将てそ竹粮全を
都したり然るに竹粮全ハ北京へいたり寧武曲をも見
へけるまゝて寧武曲ハ大ひに悦ひ竹粮全を召しぐ
して帝闕にいたり咸豊天子の天顔を拝せし
めけれも則ち兵なる指揮使の綸命有り一日千里を行

名馬なりけるに此の馬全身墨のごとくくろき故烏騅と名づけて
軍中といふ柏極全将は天恩を拝謝して罷りきたりて
武曲将と上官領を示す武曲将の曰く柏極全将軍
猛将軍には雑をもつて先鋒たらしめんや柏極全将言ふ
吉別小杜江英といふものあり元来東京の人なり是武
挙の出身なり武勇万人に勝れよく鉄鞭を善す是
を正先鋒たらしめんまた外に波斯李雲飛
といふ者は武芸早業電光のごとく長剣を善す此の
人を副先鋒たらしめん凡此等の人は樊噲張飛の勇有
て軍利眼あり武曲将大ひに悦びて其謀に従ひこの者人

急使を馳て中京へ下知せられければ不日にきたりて窝武曲
柏極全はいまみへける窝武曲大ひに悦び此
度の軍勢をゆだねしけるに老ねかしこまりて出立すよ
つて三十万の軍卒を授け此外諸将ねが将内ら
ぐんとして並に百万余人最審三万余人清陀三万余人
羅金昌五万人その外山東山西河南軍兵池加りあてた
すくべしと勅書の返書あつまる人数雲のごとく
又そのもの軍勢五十万余と記こたりかくてまるこ
柏極全は軍備をしくくのひしろを本陣のそ
を窝武曲ねひにふらぐひおほく武曲ふくさまり二人の軍

宸濠酒肴をもたせ胡猩金が方へ遣し軍糧とく
のひとへハあへしもてあそし且此酒肴ハ三軍を賞せ
ん微意を表すと申送るにぞ胡猩金使者にたいめん
なして厚意を謝し使者を又し饗應を設けして
南京石頭城へとむかへけるにぞ孔平淳この如り
さ身をもて欺じていつろく寧武曲しつあそびのごとく
家臣をさからや帝の勅命とて軍を發するに
縁じゆ梁が指揮なり家臣元璋がすゝめに素白ハ監宗
の謀りあしびえらし胡猩金ハ総軍をへしらし都記
討手を指むけけりとはぶやきけるさて彼すく應天府

石頭城にハ元璋を進めて天福王として明朝か
ハく蘆の旗をひるがへし潮し軍威を輝すたりける小
京より討手として五十万の軍攻来るよしきこえたり
さればへ元璋石頭城の諸将に集合して謀略を評議
此時に鍾山の洪武進み出ていひけるハ小京は
討手五十万といへども沿道の弱兵にて征の軍あらんや
遠かれども旅おのづから城下へ攻よせるをまつも勇なきなり
初より従て城郭へ出て雄旗を要しておかるべし元璋洪武
彼てこの義を承るべしあとし手づけをすゝしとけりも洪武
龍の曰く先に劉天冠に身一隊をもし南都金陵

小ずゝ二陣をおしゝめ章狩小ずゝ三陣をそうくしゝめ翟瑛
にて四陣れうくし先徐経小ずゝ五陣をおしゝめおのく
これ勢二万余人にて元摩よぶつら一万の兵をまつて
後陣より進む左軍の大将は張道弘玉虎班
右軍の大将は陣連赤龍海各〻二三万余人にて
賈義金系は二万余人を率して遊軍なり李吉
玉城中にありさまを隔かしむまでにあまんとそのひ
しうが兵をそつして城外にて要害は地をゑらんで
陣勢をつらねたり抜まる北京の討手は鳳天府まで一
千五百里は路を日数三十五日にはせつらる給のまふすなう

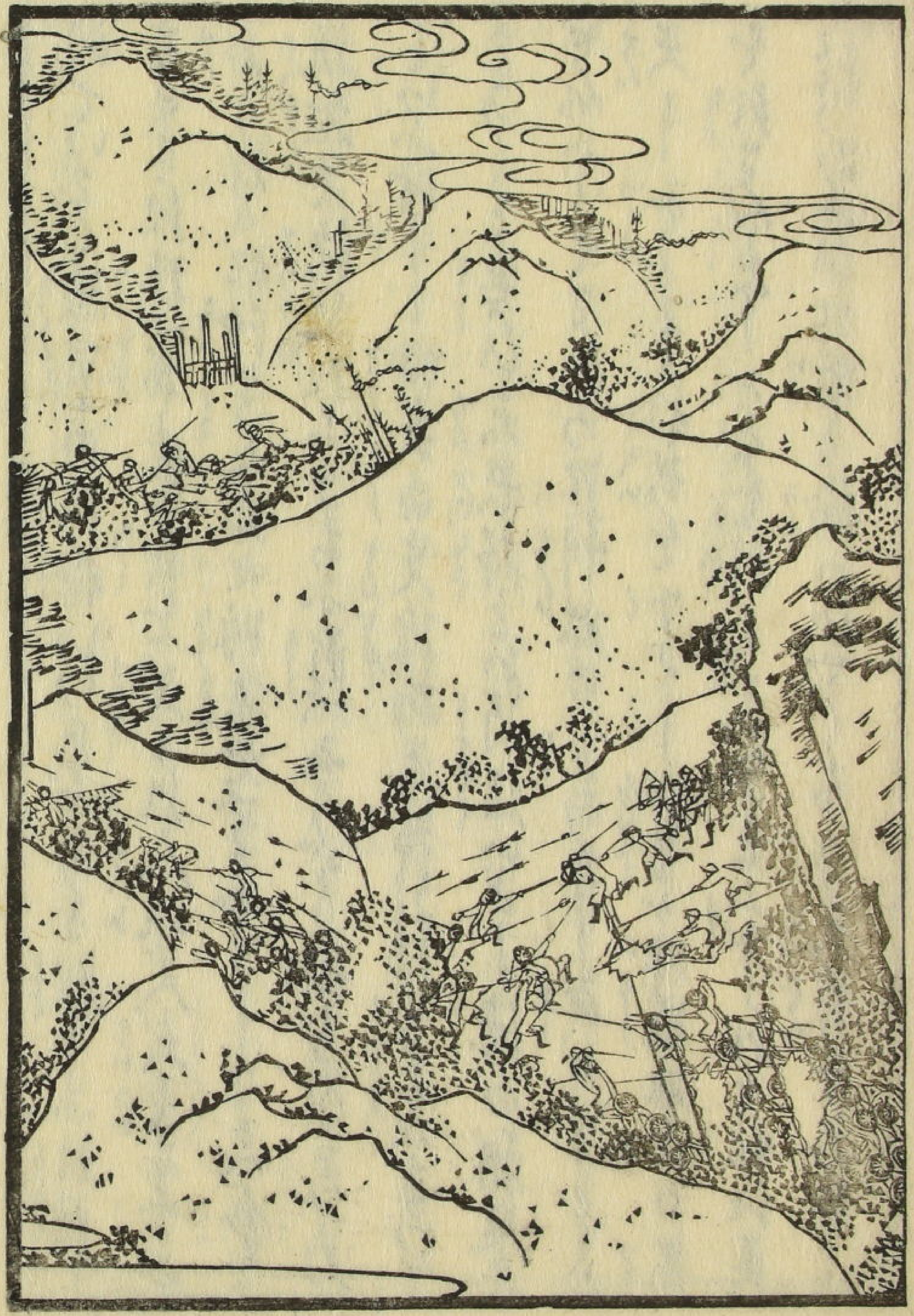
ずさしもる小早城外にぞ要害に陣鋪とりたりその兵
二十余万人と去られけるよつて輔極全は二十余里に
おく陣をとるその兵十余万余人を三隊にわけたり
とくに鰲成義左りへ備く四万余人一下手は文李朝
右にそなへ三万余人は陣輔極全は七万余人あり先
鋒社に英徐李云りおのく七万余人にて敵の未
まひ二十里をへだてゝ陣をとる其外軍の備物に
萬明岸審楊澄羅金昌一号鋒
羅深のよそがし山にそへ川にあつてあをく陣
をとり舟戦大艦をつらねしに蕭しかりし沈

ありけるが

石頭城外合戦之事

既に双方陣勢をつらね殊に朝霧たちこめてそのあひだより
両陣互にせめ太鼓をならし鬨を作つてうちかゝれば
る時に官軍の先陣猛将杜江英と號す鉄砲をうちかけ
矢石を飛せなどして旗を揚て攻寄せる城兵の中
ん陳柳天罷おそれずして強兵矢石をものともせず銅鑼
以をならし川を渡し挑み戦ふそのなかより官軍のたゝ
将杜江英と號す鉄棍ひらめかして出大音声によばゝれ

川てゝく賊軍の頭将いつもにある根り乱防を
むさぼれ狼藉して民を殺され人非人天魔までに
あり然るに汝等なんぞ降参せざるやむしろへ化を
抗拒む強梁たちまちに路べにくづり斃れんとなりん
といふ時しも城兵の先陣猛将天罷高上にあつて
うろうしと笑ひ天兵共とれ何程いくし清の朝廷に
せんにしてひろは利非のわきちまへし民のいのりを
天つげずをむれをしやくし汝等が非道非業の罪
を頭さんと手そこをれくをあきを知しれど杜江英
[illegible]おふひに怒り論むやくあり天罰を出し



るべしと鉄棍(てつ)ひらり〳〵と打ふつて柳天寵(りうてんちやう)にかゝ
かゝれば柳天寵(りうてんちやう)は槍(やり)をとりて渡り合ひて双方(さうはう)
闘(たゝか)ふ事二十余合にいたり城将(ぢやうしやう)柳天寵(りうてんちやう)漸(やうや)く力疲れ
て今はかなしと逃去(にげさ)らんとするを忠信(しのぞ)の火花(ひばな)をちら
し追(お)つかけつゝたゝかひたりける処へ官軍(くわんぐん)の副先鋒(ふくせんぽう)
沙洲(ちやうしう)の徐李雲(じよりうん)疾風(はやて)のごとく喚(さけ)んで現(あら)
はれける時城兵の二隊鄭金(ていきん)群がつて来るを繰(くり)出
し官軍(くわんぐん)徐李雲(じよりうん)ふらちむかひ棒(ぼう)をたて突(つき)たて
ひるまずさんざんに戦ひ乾坤(けんこん)と争ふといへども官軍(くわんぐん)は
目に余る大軍(たいぐん)加はれども打(う)てども更(さら)に捲(まく)り

え(?)られ城兵(じやうへい)どつと崩(くづ)れて立ち退くを三陣(ぢん)の城兵(ぜい)
章将(しやう)鎮(けん)は士卒を下知(げぢ)して崩(くづ)るゝを支(さゝ)へ鄭金(ていきん)
をたすけて弱(ひるみ)をたゝかし鎗(やり)を振り一足(ひとあし)もひかざりし
が、次(つぎ)にその外(ほか)四陣の翟璞(てきはく)又陣(ぢん)の徐経(じよけい)
おなじく兵(へい)をくり出し備(そな)へつたる官軍(くわんぐん)の横(よこ)をつき
んと馳(はせ)ゆき勢(いきほ)ひ山(やま)を裂(さ)くごとし時(とき)に官軍(くわんぐん)左右(さいう)の先(さき)へ文李(ぶんり)
朝(てう)糜成(びせい)蔡(さい)大(たい)の両将士卒に下知して突(つき)かゝる翟璞(てきはく)
徐経(じよけい)の備(そな)へ人波(ひとなみ)うたせて渡り合ひ敵(てき)がすゝみあつまり
りぜんおし寄(よ)せ一人も洩(もら)さず討取(うちとれ)やと
鎗(やり)先(さき)揃(そろ)へて、二三に攻(せめ)たて揉(もみ)立(たて)る多勢(たせい)に包(つゝ)まれ

翟琰徐徑が軍なんぎとみへたりける此時元嘩は
左右の侍へ長道弘王虎斑陣達赤龍海
のともがらを觀波をつくり衝をさ攔くの怒りをあらはし
則ち翟琰徐徑をたすけて水火をわすれと戦ふたり
此時官軍の苗童明潘澄崔審羅金昌兵を
ひきゐ大将元嘩が本陣を目懸て進むを遊軍は貫
義金翁亨しつゝり合せ花を散らし戦ふ時しも先
にすゝみし柳天寵二將の鄭金錢たびも前に勢
をもり返し踏止つてたゝかひしが吉列の杜に英琰陳楯
おふりたてゝおちまうひ怪虎のおとしたるをし続

て汝列は孫李玄が長鋒もつて切立るへ恰も草を刈るごとし
鄭金錢柳天寵こゝくもどつと吶喊て後を追つて
官兵すゝしくに軍は勝たり此図をぬかさず進めと勢ひ
立三度斗りも捲り付たり城兵の本陣は軍師法武龍
此体を見て元嘩にむかひ先勢の味かくなんき
とみへたりこれむかつてまくるんと言捨るにかりとるち
発り旗本勢を引率し本陣先に進て傍ほくる
たる官軍へ面もふらずつき入りしが忽ちに扇山の法武龍
たちまちに死骸の山を築なをもすゝんで突かゝる子葉
稲妻のはしるがごとしひて進む剣兵を四角八面に

る故いろめき立たる官軍をみるより武號ハ大きに
軍ハうちたりをすれとも賊から突たてゝかゝる
所へ城中に殘り居りし李白玉ハ先陣より味方き
れ雑兵なるに去のひそ新手の兵を率ゐ萬斗りを引て
つし城門開きて繰出し敵中へ入るとみへしが
蕭丈不弟子業盤の勇婦也これ六に拘る長須に
て蕭李巴とさり居る此鬪ひに官軍ハ惣崩となりて
敗走す、よつて章府鄧翟瑛鄧貫蕭金象平
此擒軍まで是に身を沒てそなへを乱しくぜれ立てる
官軍をうちたて切立追ふる時しも日ハ西にかたむきて
面もふらずたゞれど官軍賊共ともに互ひに引わかれ各
元帥が指揮を待つて賊兵を引とり官兵ハ引退きて
野陣を張り用心堅固にしてぞ扣へ居たる

外邦太平記巻之一終